

## 6. $Q$ から $R$ へ (1) DEDEKIND の切断

本節および次節では、有理数全体の集合  $Q$  についての基本的な性質（演算・大小関係など）については既知（既に基礎付け済み）であるが、実数全体の集合  $R$  についてはここで構成するまで知らない、という立場で考えよ。

$Q$  の部分集合の対  $(A, B)$  が次を満たすとき、 $Q$  の切断であるという：

- $A \neq \emptyset, B \neq \emptyset, A \cup B = Q, A \cap B = \emptyset$
- $\forall a \in A, \forall b \in B : a < b$

このとき、次の3つの場合がある：

- (I)  $A$  には最大値がなく、 $B$  にも最小値がない
- (II)  $A$  には最大値  $\max A$  が存在し、 $B$  には最小値がない
- (III)  $A$  には最大値がなく、 $B$  には最小値  $\min B$  が存在する

本節の構成では、次で  $R$  を定める：

- $R := \{(A, B) \mid Q \text{ の切断で、type (I) または (II) }\}$

問 6-1A.  $Q$  (に限らず、順序関係  $\leq$  が定義されている集合) の部分集合  $S$  の最大値  $\max S$  および最小値  $\min S$  の定義を述べよ。(論理式を用いて満たすべき条件を書き下せ。)

問 6-2A.  $Q$  の有界な部分集合  $S$  で最大値も最小値も持たないものの例を挙げよ。

問 6-3B.  $Q$  の切断で type (II) のものと type (III) のものとは一対一に対応する。(上の  $R$  の構成では、 $R$  内の有理数に対応する。)

問 6-4B.  $Q$  の切断で type (I) であるものの例を挙げよ。

問 6-5B. 有理数  $c \in Q$  に対応する type (II) の切断を自然に定めることにより、単射  $\iota : Q \rightarrow R$  を定めよ。(これにより  $c \in Q$  と  $\iota(c) \in R$  とを同一視して  $Q \subset R$  と見る。)

問 6-6B.  $Q$  の切断 (即ち  $R$  の元) の間に、大小関係  $\leq$  を次で定める：

- $(A_1, B_1), (A_2, B_2) \in R$  に対し、 $(A_1, B_1) \leq (A_2, B_2) \iff A_1 \subset A_2 (\iff B_1 \supset B_2)$

(1) このとき、次が成り立つ：

- (a)  $\forall x \in R : x \leq x$
- (b)  $\forall x, y \in R : x \leq y, y \leq x \implies x = y$
- (c)  $\forall x, y, z \in R : x \leq y, y \leq z \implies x \leq z$

(2)  $Q$  上の大小関係  $\leq$  との間で次を満たす：

- $\forall a, b \in Q : a \leq b \iff \iota(a) \leq \iota(b)$

問 6-7C. (順序に関する  $R$  内での  $Q$  の稠密性)  $x_1 = (A_1, B_1), x_2 = (A_2, B_2) \in R$  に対し、 $x_1 < x_2$  ならば、或る  $c \in Q$  が存在して  $x_1 < c < x_2$  となることを示せ。

問 6-8C.  $R$  の切断には type (I) がないこと (すなわち type (II) または (III) であること) を示せ。

問 6-9D.  $R$  に加法  $+$  および乗法  $\cdot$  を自然に定義し、諸々の良い性質が成り立つことや、上で定めた大小関係と同調することを示せ。

## 7. $Q$ から $R$ へ (2) CAUCHY 列の類別

$Q$  内の Cauchy 列全体の成す集合を  $C$  とし、 $C$  上の関係  $\sim$  を次で定めると同値関係である：

- $\mathbf{a} = (a_n)_{n=0}^{\infty}, \mathbf{b} = (b_n)_{n=0}^{\infty}$  に対し、  
 $\mathbf{a} \sim \mathbf{b} \iff a_n - b_n \rightarrow 0$   
 $(\iff \forall \varepsilon > 0 : \exists N \in \mathbf{N} : \forall n \in \mathbf{N} : n \geq N \implies |a_n - b_n| < \varepsilon)$

本節の構成では、次で  $R$  を定め、 $a \in C$  の属する同値類を  $\bar{a} \in R$  と書く：

- $R := C / \sim$

問 7-1B. 上で定めた  $C$  上の関係  $\sim$  が同値関係であることを示せ。

問 7-2B.  $\iota : Q \rightarrow R$  を  $\iota(a) := \overline{(a, a, a, \dots)}$  で定めると、 $\iota$  : 単射。(これにより  $c \in Q$  と  $\iota(c) \in R$  とを同一視して  $Q \subset R$  と見る。)

問 7-3B. 一般に列  $a = (a_n)_{n=0}^{\infty}$  に対し、(狭義)単調増加な自然数列  $(k_n)_{n=0}^{\infty}$  (即ち、 $k_0 < k_1 < k_2 < \dots$ ) によって定まる列  $(a_{k_n})_{n=0}^{\infty} = (a_{k_0}, a_{k_1}, a_{k_2}, \dots)$  を  $a$  の部分列という。 $a = (a_n)_{n=0}^{\infty} \in \mathcal{C}$  に対し、その任意の部分列  $a'$  も  $a' \in \mathcal{C}$  であり、かつ  $a \sim a'$  であることを示せ。

問 7-4B.  $R$  上の加法  $+$  について、

- (1)  $\mathcal{C}$  の加法  $+$  を次で定めると well-defined :
  - $a = (a_n)_{n=0}^{\infty}, b = (b_n)_{n=0}^{\infty} \in \mathcal{C}$  に対し、 $a + b := (a_n + b_n)_{n=0}^{\infty}$   
(ここでの well-defined とは、 $a, b \in \mathcal{C}$  に対し、 $a + b \in \mathcal{C}$  という事。)
- (2)  $R$  上の加法  $+$  を次で定めると well-defined :
  - $\bar{a}, \bar{b} \in R$  に対し、 $\bar{a} + \bar{b} := \overline{a + b}$   
(ここでの well-defined とは、代表元の取り方に依らないということ。)
- (3) 上で定めた  $R$  上の加法  $+$  は、( $Q$  上の加法  $+$  で成り立つような) しかるべき良い性質を満たす。

問 7-5C.  $R$  上の乗法  $\cdot$  について、

- (1)  $\mathcal{C}$  の乗法  $\cdot$  を次で定めると well-defined :
  - $a = (a_n)_{n=0}^{\infty}, b = (b_n)_{n=0}^{\infty} \in \mathcal{C}$  に対し、 $a \cdot b := (a_n \cdot b_n)_{n=0}^{\infty}$   
(ここでの well-defined とは、 $a, b \in \mathcal{C}$  に対し、 $a \cdot b \in \mathcal{C}$  という事。Cauchy 列が有界であることを用いると良い。)
- (2)  $R$  上の乗法  $\cdot$  を次で定めると well-defined :
  - $\bar{a}, \bar{b} \in R$  に対し、 $\bar{a} \cdot \bar{b} := \overline{a \cdot b}$   
(ここでの well-defined とは、代表元の取り方に依らないということ。)
- (3) 上で定めた  $R$  上の乗法  $\cdot$  は、( $Q$  上の乗法  $\cdot$  で成り立つような) しかるべき良い性質を満たす。(本問では乗法  $\cdot$  の逆演算 (除法) に関するもの以外に留める。)

問 7-6D.  $R$  の大小関係について、

- (1)  $a = (a_n)_{n=0}^{\infty} \in \mathcal{C}$  について、次のいずれか一つ、しかも一つだけが成り立つ :
  - (I)  $a \sim \mathbf{0} := (0, 0, 0, \dots)$  (即ち  $\bar{a} = \bar{\mathbf{0}} = \iota(0)$ )
  - (II)  $\exists c \in Q : \exists N \in N : \forall n \geq N : a_n > c > 0$
  - (III)  $\exists c \in Q : \exists N \in N : \forall n \geq N : a_n < c < 0$
- (2)  $a \sim a'$  (即ち  $\bar{a} = \bar{a}'$ ) ならば、上のうちでどれが成り立つかが一致することを示せ。
- (3)  $\bar{a}, \bar{b} \in R$  に対し、次で関係  $<, >$  を定めると well-defined である :
  - $\bar{a} < \bar{b} \iff a - b$  が type(III)
  - $\bar{a} > \bar{b} \iff a - b$  が type(II)
- (4) 上で定めた  $R$  上の関係  $<, >$  は次を満たす :
  - (a)  $\forall x, y \in R$  に対し  $x < y, x = y, x > y$  のうち一つ、かつ一つのみが成り立つ。
  - (b)  $\forall x, y, z \in R : x < y, y < z \implies x < z$
- (5) この関係は  $R$  上の演算と同調する。即ち、
  - (a)  $\forall x, y, z \in R : x < y \implies x + z < y + z$
  - (b)  $\forall x, y, z \in R : x < y, z > 0 \implies x \cdot z < y \cdot z$
- (6)  $Q$  上の大小関係  $<$  との間で次を満たす :
  - $\forall a, b \in Q : a < b \iff \iota(a) < \iota(b)$

問 7-7C.  $\bar{a} \in R$  に対し、 $\bar{a} > \mathbf{0}$  ならば、或る  $c \in Q$  に対し、 $0 < c < \bar{a}$  となることを示せ。

問 7-8D.  $\bar{a} \in R$  に対し、 $\bar{a} \neq \bar{\mathbf{0}}$  ならば、 $\bar{a} \cdot \bar{b} = \bar{\mathbf{1}} (= \iota(1))$  となる  $\bar{b} \in R$  が存在することを示せ。

問 7-9D.  $Q$  内の数列  $a = (a_n)_{n=0}^{\infty}$  について、 $a_n \rightarrow \alpha \in Q$  であるとき、 $R$  内でも  $\iota(a_n) \rightarrow \iota(\alpha)$  となることを示せ。

問 7-10D. (距離に関する  $R$  内での  $Q$  の稠密性)  $\bar{a} \in R$  および  $\varepsilon > 0$  に対し、或る  $c \in Q$  が存在して  $|\bar{a} - c| < \varepsilon$  となることを示せ。

問 7-11D.  $R$  内の Cauchy 列は、 $R$  内で収束することを示せ。